

交通案内



- JR亀川駅より亀の井バス別府医療センター行き6・23・26番系統に乗車、別府医療センター前で下車（駅よりバスで8分、徒歩で12分）
- JR別府駅東口より亀の井バス23・26番系統に乗車、別府医療センター前で下車（駅より25分）
- JR別府駅西口より亀の井バス6番系統に乗車、別府医療センター前で下車（駅より25分）
- 大分自動車道別府インターチェンジより自動車で10分

大腸がん



地域がん診療連携拠点病院

独立行政法人 国立病院機構

別府医療センター

〒874-0011 大分県別府市大字内かまど1473番地
TEL(0977)67-1111 FAX(0977)67-5766
ホームページ <https://beppu.hosp.go.jp>

地域がん診療連携拠点病院

独立行政法人 国立病院機構

別府医療センター

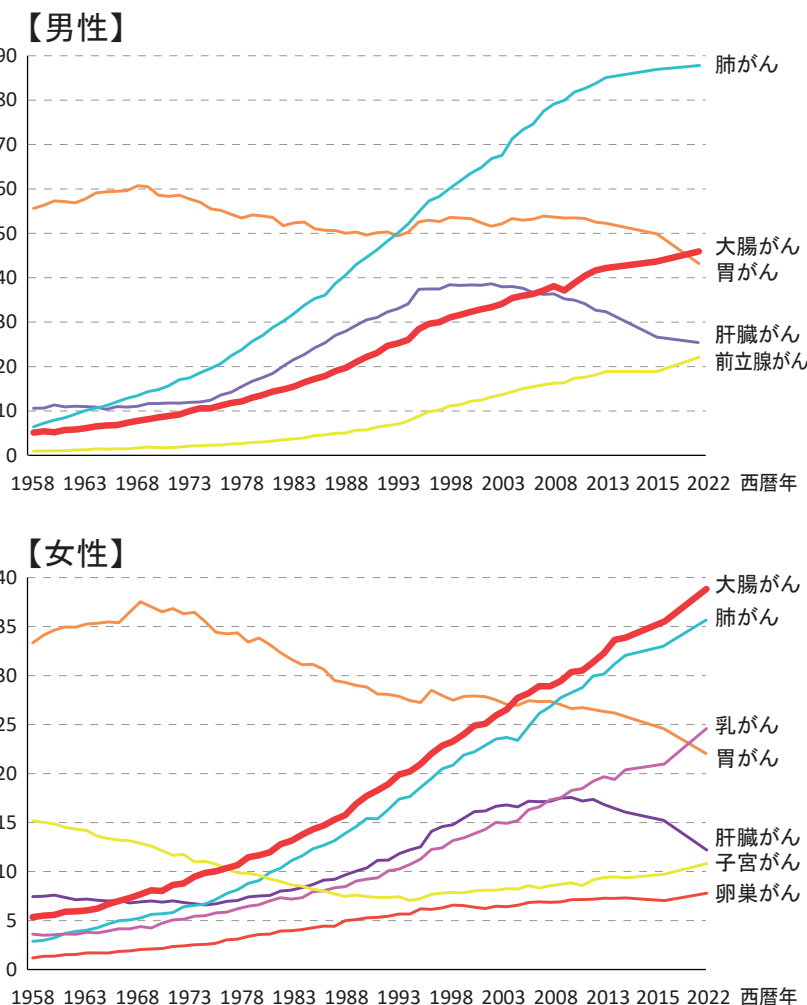
はじめに

食物は、胃や十二指腸、小腸で消化され、その栄養素が吸収されます。そして消化・吸収が終了し液状になった残渣は最後に大腸に入り、水分やミネラルが吸収され半固形から固形の便になります。大腸がんはこの大腸の内側を覆う粘膜から発生します。大腸がんの中には遺伝との関連が明らかにされているものもありますが、多くの大腸がんでは原因はまだ分かっていません。しかし、食べ物の中に含まれる発がん性物質や肥満、飲酒などが大腸がんの発生に関与しているのではないかと考えられています。

高齢化と生活習慣の欧米化に伴って、大腸がんは増え続けています。現在、わが国における「がん」死亡原因のうち大腸がん（結腸がんと直腸がん）は男性で第2位、女性で第1位です（図1）。

一方、診断や治療が進歩して大腸がんは今では治りやすいがんの一つともいわれています。診断レベルが向上して、早期のがんが多く発見されるようになったことや、安全でしかも十分な治療ができるようになった成果で

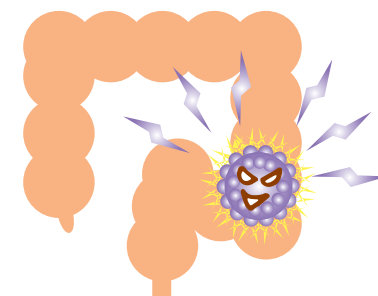
図1. 部位別のがん死亡率の推移
(人口10万人あたり)



もありますが、最近では早期がんの患者さんにとって身体にやさしい治療も工夫されています。

症状

大腸がんには特異的な症状はありません。腹痛や腹部のしこり、便秘や血便、便柱が細くなるなどの症状を契機に発見されることもありますが、進行をしていても症状が全くないことも珍しくありません。ですから症状がなくても年に1度は定期的な検診を受けることが大切です。また、急に便通がおかしくなった、便に血液が混じる等の症状が続くときには早めに受診するようにしましょう。



検査と診断

大腸がんは簡単な便の検査で発見することも可能です。肉眼では正常に見える便でも検査で少量の血液（潜血）が認められれば内視鏡検査が行われます。また、便秘や下痢、血便、便柱が細くなるなどの症状がある場合にも内視鏡検査が勧められます。

内視鏡検査で異常があれば、がんが疑われる場所の組織を採取してがん細胞の有無を顕微鏡で調べます（病理検査）。大腸がんと診断された場合には、がんの広がりを知るためにCT検査を中心に適切な検査を行っていきます。

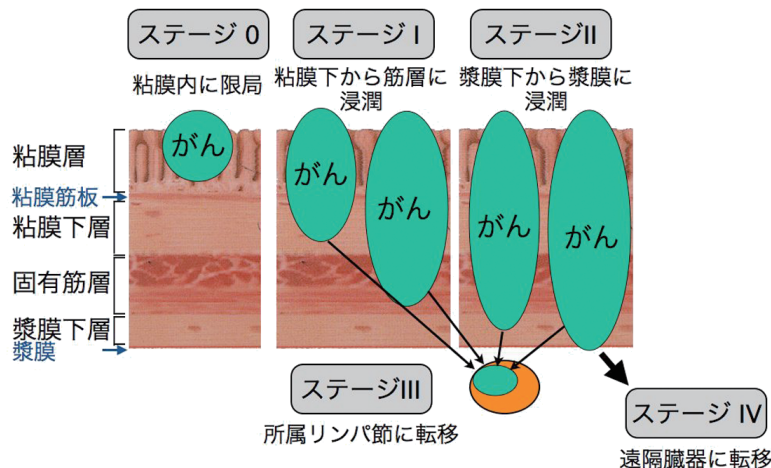
病期（ステージ）

大腸がんは大腸の粘膜から発生しますが、時間経過とともに大腸の壁の深い層や周囲の臓器へ広がり、さらにリンパ液や血液の流れに乗って他の臓器へ移動していきます。がんが周囲に広がることを「浸潤（しんじゅん）」、他の臓器に移動することを「転移」といいます。こうした「浸

潤」や「転移」により大腸がんの進行程度を表す言葉が、「病期」または英語をそのまま用いた「ステージ」です(図2)。

ステージ(病期)は治療前の検査によって決められますが、手術の際の所見や摘出した臓器の顕微鏡検査の結果、転移などが見つければ変更されることもあります。ステージは大腸がんの治療方針を決定するためにとっても重要です。

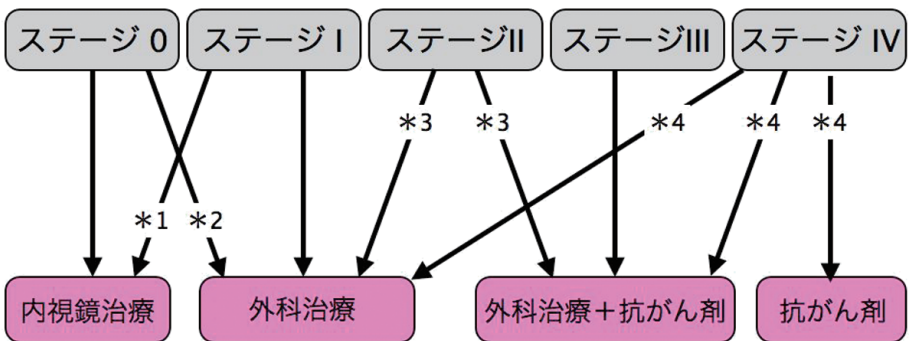
図2. 大腸がんのステージ(病期)



治療

大腸がんの治療はステージにもとづいて決まります(図3)。大腸癌研

図3. ステージ(病期)からみた大腸がんの治療方針



- *1 粘膜下への浸潤が軽度で、比較的小となしいタイプのがんである場合
- *2 内視鏡では切除が難しい大きさや形の場合
- *3 比較的小となしいと考えられるがんでは外科治療のみ
- *4 転移の個数や大きさによって治療法を選択

究会により定められた「大腸癌治療ガイドライン」にはステージにあわせた治療法の選択がより詳しく述べられています。

1. 手術

大腸がんは手術で病巣を切除することが最も有効な治療です。手術には従来から行われてきた開腹手術に加えて、腹腔鏡手術や内視鏡治療(ロボット支援下手術を含む)も最近では盛んに行われるようになりました。

a) 内視鏡治療

大腸がんの細胞が顕微鏡検査により比較的小となしいタイプと判定され、病変が粘膜内にとどまり、大きさや形なども考慮してリンパ節へ転移している可能性が極めて低いと判断された場合には、内視鏡を用いて大腸の内腔からがんを含めた大腸壁の一部を切除します。大腸の粘膜には知覚神経はありませんので、通常は痛みを感じることはありません。治療後は経過観察のため入院が必要となります。切除された組織は顕微鏡で検査され、がんの取り残しがないか、また転移や再発の危険性が高くないかを確認します。病巣が深い層に広がっていたり、完全に切除できない場合などは外科治療の追加が必要となります。

b) 外科治療(開腹手術)

従来から最も有効で標準的な治療とされてきました。がん部を含めて20~30cmの大腸を切除すると同時に、決められた範囲の大腸周囲のリンパ節を摘出(リンパ節郭清(かくせい))します。結腸がんや上部の直腸がんでは食事が摂れるように、残った腸管の断端を吻合(再建)します。がんが直腸の下部にあり肛門縁に近い場合には人工肛門をつくる場合もあります。

c) 外科治療(腹腔鏡手術)

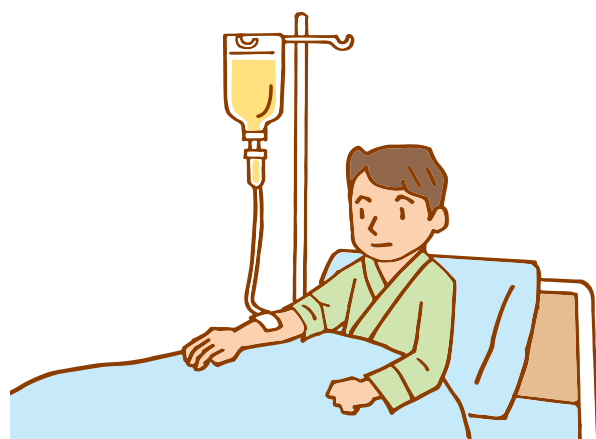
切除範囲や再建方法は開腹手術と同じですが、腹部に小さな穴を数カ所開けて、腹腔鏡というビデオスコープと専用の細長い器具を用いて

行われる手術です。手術後の痛みが軽く手術からの回復が早いという利点があります。従来、腹腔鏡手術は内視鏡による治療が出来ない比較的早期のがんに対して主に行われていましたが、最近では進行した大腸がんに対しても実施されるようになりました。全国的にも大半の症例に腹腔鏡下手術が選択されるようになっていきます。

大腸が切除されても消化、吸収に大切な胃や十二指腸、小腸は残るため食事を消化吸収する機能は保たれています。しかし、直腸などの手術後には排便回数が増加したり、一度に排便する量が減少したりすることもあります。また直腸がんの手術後には排尿や性機能に障害が残ることもあります。しかし、仕事や運動などの日常生活については手術前とほぼ同じように過ごすことが出来ます。また、手術方法の工夫や、放射線や抗がん剤による治療を併用して出来るだけ人工肛門をつくらない取り組みも行われています。

2. 抗がん剤治療(化学療法)

抗がん剤による治療のみで大腸がんを完治させることは難しいのが現状です。しかし、大腸がん手術に抗がん剤治療を組み合わせる補助化学療法により大腸がんの手術後の再発の可能性を低くできることが証明されています。また、大腸がんを手術により切除ができない場合には抗がん剤を中心とした治療が選択されます。手術と組み合わせた治療では、決められた期間(3~6ヶ月ほど)抗がん剤を使用すれば治療は終了します。一方、大腸がんを切除ができない場合には、あらかじめ治療期間を決めるのではなく治



療効果と副作用、そして体力などをよく見ながら治療を続けます。

いずれの場合においても日常生活が可能な程度の体力を維持しながら治療することが原則です。最近では副作用を抑える薬の進歩や副作用が少ない新薬の開発によって、入院することなく通院しながら効果的な治療を受けることも可能となりました。

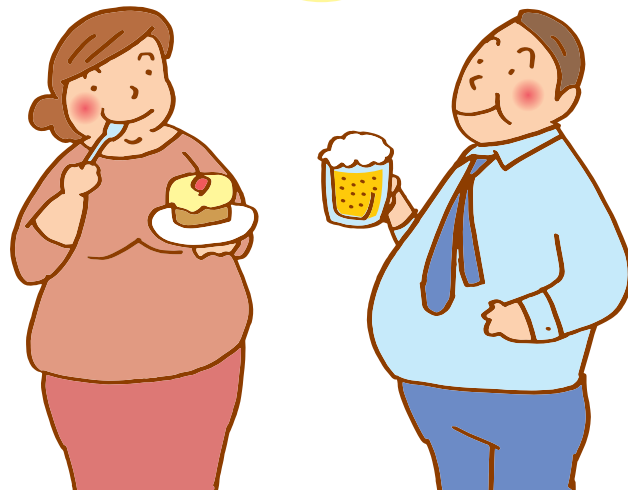
このように、大腸がんの手術方法や抗がん剤など治療法は進歩しています。しかし、一方で治療を受けるみなさんが高齢であったり、様々な併存疾病(いわゆる持病)があり、単にステージだけでなく一人ひとりの状況によって治療法の選択を考慮する必要があります。当院では、「カンサーボード」という外科、内科、放射線科、病理診断科による合同カンファレンスで患者さん一人ひとりの治療方針(手術、放射線治療、化学療法を含めて)について検討しています。

経過観察

治療が終わった後も体調の確認や再発がないかを確認するため定期的な通院や検査が必要です。簡単な検査は近くのかかりつけの先生のもとでも可能です。たとえ手術や抗がん剤治療によりがんの病巣が見えなくなっても、他の臓器に転移や浸潤してわずかに残ったがん細胞が再び発育して姿を現す(再発)ことがあります。一般には治療後5年間は定期的な検査が必要とされています。



食べ過ぎ&飲みすぎに
気を付けましょう!



大腸がん予防に関する生活習慣

予防的な因子	危険な因子
運動	肥満
食物繊維(*キノコ、海藻)	赤肉・加工肉
牛乳	アルコール
カルシウム	喫煙
食物ポリフェノール(緑茶、大豆)	
白肉(トリのむね肉など)	

世界がん研究基金/米国がん研究協会の評価報告書(2007年)をもとに、
当院の矢野名誉院長の評価を追加した(青字)。

*食物繊維が豊富であり、免疫力を上げる効果もある。

心強いチームの紹介

がん相談支援センター

当院には、患者さん・ご家族をはじめ地域の皆さんの
がんに関するさまざまな不安や悩み(医療費、転院、保
険、福祉制度など)の相談窓口として、**がん相談支援セ
ンター**(場所:外来棟1階 総合相談窓口)があります。
お気軽にご相談ください。

緩和ケアチーム

当院では、がん診療を受けている患者さんのからだの
痛みやこころの苦しみを和らげ、その人らしい生活が
送れるように支援する専門の医療チーム(**緩和ケア
チーム**)が活動しています。緩和ケアチームの支援をご
希望される場合は、総合相談窓口にご相談ください。

■ご案内図

